2023 年 10 月 20 日

学力課題に関する質疑

〇松本議員

（略）

続きまして、３番目、これは議論されています学力向上の取組です。令和５年度の全国学力･学習状況調査の調査結果は令和４年度のまさに結果の集大成かと思っております。その中で、昨年度に引き続いて小学校はよい結果ということで、令和４年度もしっかりされたと評価いたします。

しかしながら、小学校は向上しているものの、中学校は横ばい傾向であり、比例していないことについてどのようにお考えなのかお聞かせください

〇松本学校教育課参事

（略）

学力につきまして、令和５年度の全国学力・学習状況調査の結果についてでございます。小学校は上昇傾向にある一方で、中学校が横ばい傾向にあるということでございます。こちらにつきましては、中学校における学習内容の量の面の増加、そして質の面の抽象度が高くなるという部分､そうしたことから定着に関して小学校よりは学校以外での学習時間が必要であろうと思われます。

しかしながら、この全国学力・学習状況 調査の質問の結果を見ますと、本市におきましては学校以外で学習する時間が３０分以下である中学生の割合が高い傾向にございまして、そうしたことが影響しているのではないかと捉えております。

〇松本議員

（略）

続きまして、学力向上の取組です。中学校の点数が伸びないところは、学習内容の増加や質が難しくなっていくというところでの理解をいたしました。

点数のところでもう一点気になっております。本調査では、中学校では自分によいところがあるが、小学校よりも１０ポイントも下がっております。これに関しては、私は中学校の構造、システム上の課題があると考えております。その大きな要因としては、先ほど言われたこともあり、また高校受験があって、テストの成績への評価重視と勉学の難易度が増すことによって成績差が小学校と比較して大きくなることです｡学力メインとなり、学力が伸びないと評価されない、それによって重視される成績の評価が低いと、自己肯定感も下がってしまうと推測しております。

私は義務教育において自己肯定感が下がって終えてしまうことは望ましくないと考えております。教育委員会としても同様の考えかと思いますけども、この課題についてどうお考えかお聞かせください。

○松本学校教育課参事
（略）
　続いて、3番目の自分によいところがあるという質問項目への肯定的解答が低いことに対して、どのように考えているかについてお答えいたします。
　子供たちにとって学校生活での学習はもちろん大切ではありますが、それが全てではございません。子供たちが様々な場面で活躍できる、輝ける場面を設定していくことが重要かと考えております。
　そこで、本市といたしましては、子供が主役の学校づくりに全小・中学校が取り組んでおり、例えば行事を行うに当たって、子供たち自身が企画や実際の運営を行い、協力し合うことで達成感を持ったり、自信をもっていける取組を行っております。今後もそうした取組を推進してまいりたいと考えております。

○松本議員
（略）
　中学校における自己肯定感が下がってしまう傾向への対応が求められると思います。
　それを解決しようとする学校もあり、例えば先日、弘委員も紹介された映画、「夢見る小学校」は私も見させていただきました。（実際は「夢見る校長先生」で、「夢見る小学校」は誤り）そこでは校則をなくす、あるいは定期考査をなくす、通知をなくす。それに代わって定期考査をなくした場合は毎朝小テストをするなど、子供の評価をこれまでと少し変えていく工夫がされておりました。本市もいきなりというわけではないですけども、学力以外での取組、評価する視点が求められると思っております。
　先日も一般質問させていただきましたコト・モノ体験や中学校での部活動などを評価する幅を増やし、学力についても習熟状況に応じたクラス対応も考えていくべきかと思います。それこそ個性を大事にすることになります。　ＩＣＴ教育の個別学習の最適化もまさにそういったところでは活躍をするのかと思いますので活用をお願いいたします。　評価の幅を広げる、自己肯定感の可能性を広げることは不登校対策にも通じるものと考えております。
　そして、中学校の課題を取り上げました、あるべき大人に向けてキャリア教育の充実など、子供たちの生きる力を育むには総合的な取組と小・中一貫教育の充実も必要であります。先ほど質問している就学前教育との連携も同様です。
　改めて教育総務部、そして次世代育成部が一致団結して本市の児童・生徒の生きる力を養う取組に推進すべきです。最後、教育長の総括的なお考えをお聞きしたい。

○箸尾谷教育長
　私はその夢見る小学校は拝見してないんですけども、マスメディアで様々な学校の取組が紹介されます。東京都でテストもやめてしまった学校も紹介されてました。
　ただ、教育はやり直しがきかない、例えば中学１年生は一度きりしかないですから、１年生をやってみて駄目やったからもう一回１年生をやるというわけにいかないんです。私は教育はやり直しがきかないと常に意識しながらやってます。ですから、試してみることがあまりできないんです。マスメディア等で紹介される各学校の取組は子供一

人一人の力はもちろんですけれど、保護者の意識、家庭環境でありますとか、あるいは地域性も全部ひっくるめて成り立ってると思うんです。

私がここへ教育長として来て学力向上にこだわったのは、先ほど申し上げましたけど、中学校の教員生活が根底にあるんです。私は中学校で１５年しか教員はできませんでしたけど、その間に６回、中学校３年生を担任しました。単純計算したら２４０人の子供の進路選択に関わったわけです。２４０人の中でうまくいった子もいっぱいいます。しかし、うまくいかなかった子もいます。

記憶に残るのはやっぱりうまくいかなかった子たちです。電話で私学の入試の発表がある、家には結果が届いてるはず、私は家に結果が届いたら電話してとお願いをしたけれども、なかなか電話がかかってこない。どうしたかと思ったら高校から学校にも直接報告が来たんです。残念な結果でしたと。残念な結果が分かりながら電話がかかってこないので、家へ電話をしました。そこは共働きの家庭だったので、子供１人しかいないことも分かってました。女の子でしたけど、電話は取ってくれたんですけど一言もしゃべらない。どうしたんや、元気か、大丈夫か、どうやったと白々しく聞かないと仕方がないので、聞くんですけれど、何も言わないでただ泣き声だけが聞こえるんです。本当にどうしてやることもできない。大丈夫か、誰かいるか、お父さん、お母さん帰ってきたか、そんなことまで心配しました。

また、やんちゃばっかりしてて俺高校なんか行かへん、そう言うてた子がやっぱり最後にはどっか行きたいと言い出して、でもいまさら勉強しても高校は難しいので専門学校の進学を勧めて専門学校に行きました。でも何年かして同窓会で会ったときに、先生俺やっぱり高校に行きたかったわと言われたこともあります。そのとき何で３年生の最初にもっと強く指導してれば、この子は違う人生を歩めたとも思いました。

そういうことがずっと残ってる中で、摂津の子供たちは入試では三島地区の子供たちと競争して行くんです。そして高校に行ったら三島地区の子供たちと同じクラスになるんです。ご存じのように三島地区各市は、やはり学力高い子供たちが多いんです。そんな中で摂津の子供たちどう思われるのか。やはり私は中学校でしっかり学力をつけてやる必要があると思って教育長になってやってきました。小学校の学力は上がってきましたが残念ながら、中学校はなかなか上がらない。それは先ほど課長が申し上げたとおり、皆さんも経験あると思うんですけど、中学校のテストの点を取ろう思うたら授業だけをしっかり聞いてても点が取れるわけじゃない。やっぱり家で問題集をやるとか、いろんな類題を解くとか、そういう努力が必要なんです。

でも残念ながら、摂津の子供は家で学習してくれない子が多いので、なかなか中学校の結果が出ません。

しかし、これからは小学校でしっかり力をつけてきた子が中学校に上がっていくわけですから、私は先日の校長会でも、これからは中学校の教育が問われると。小学校の授業改善は進んできた。そして、これからその授業改善でしっかり力をつけた小学生が上がってきた中学校でどんな授業をしていくかが大事なんやという話をしております。

私は決して学力と自己効力感は二者択一じゃないと思うんで。こっちを取ったらこっちがなしでもいいとか、こっちのせいでこっちが低くなるとかそんな話じゃないと思います。どちらもやっぱり子供たちにはつけていってやりたい。

そういう意味では、やはり先ほど松本委員がおっしゃってましたけど、就学前、小学校、中学校と上がってきますけれど、同じ子供ですから、やっぱり一定連携した取組が必要だと思っています。

そういうことで、先ほど担当参事から紹介がありました、就学前教育・保育実践の手引きには本当にいいことがいっぱい詰まってます。小学校でもスタートカリキュラムといって、就学前教育で受けてきた教育をどうやって小学校に引き継いでいくのか、どうやって受け止めていくのかが書かれてます。ですから、これからは今までなかなか就学前教育と小学校のかけ橋がうまくいってなかったところもあるんですけど、このせっかくできたすばらしい手引きを利用して、連携を図りたい。

先ほど申し上げたようにやっと小学校で力つけてきた子供たちがこれから中学校へ上がっていくわけです。小・中連携もしっかりして、子供たちの学力をつけていきたい。それと同時に、自己効力感も育んでいきたいと思います。

〇松本議員

（略）

最後、要望とさせていただきます。

３番目の学力向上の取組についてです。教育長の熱い思いを聴かせていただきました。ありがとうございました。

おっしゃるように、私も先般の一般質問で、全国的に中学校の場合も、学力と自己肯定感は比例する傾向があり、当然、学力が高ければ自己肯定感も高くなるということではあります。

しかしながら、本市の状況でなかなか今の横ばいでも、ひと工夫、直接アプローチプラス間接アプローチ、コト・モノ体験とかを踏まえ、非認知能力の向上が学力向上につながるという資料もあります。どうバランスを取っていくのかしっかりと考えていく必要があろうかと思います。

先ほど教育長がおっしゃられたように、小学校で力をつけた子供たちが中学校に入っていく、そこがどうつながっていくのかは極めて緊要なタイミングになろうかと思いますので、しっかりと対応していただきたい。

子供は就学前、小学校、そして中学校と全て積み重ねであります。それぞれに必要な力をしっかりとつけて送り出すことを連携してやっていただきたい。引き続き学力向上に向けた取組、生きる力を育むため、しっかりと尽力されるよう要望させていただきます。